

## 愛知・印場城跡



(瀬戸)

- 1 所在地 愛知県尾張旭市庄中町渋川
- 2 調査期間 第二次調査 一九九五年（平7）五月～一月
- 3 発掘機関 尾張旭市教育委員会
- 4 調査担当者 七原恵史
- 5 遺跡の種類 城館跡
- 6 遺跡の年代 室町時代
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

印場城は、矢田川によって形成された沖積平野に築造された東西、南北ともに六〇m、土壘と堀をめぐらせた単郭の平城である。内郭の施設として、柵列と内郭中央から北東部にかかる溝は確認できたが、その他の遺構は明確にできなかつた。

土壘は幅五m、高さ二m、  
堀は毛抜堀、他は箱堀で  
ある。南堀は幅八mに及ぶ。

堀の水は南から取水溝を通じて得ていたが、農業用水

の一部が堀に流用されたものと推測される。  
木簡は、東堀から南堀にかかる屈曲部の底に堆積したヘドロの中から漆器椀、箸、蒸籠、めんぱ、羽子板、子供用下駄、施釉陶器などとともに二点出土した。遺物は生活に密着したもので、印場城の時代に属するものである。

城の年代に関する記録は、水野又太郎良春がこの地域に入植し、良春の孫雅楽頭宗国が新居城を築いたが、その年次は寛正元年（一四六〇）とされており、その後西隣の尾関氏と争つて勝利し、この地域を支配したとある。出土遺物もこの年代と一致し、一五世紀後半と推定できる。

墨書き土器は、平安時代に属する瓷器の椀に「小林」「福林」「吉（あるいは「去」）」、美濃系山茶椀の底に「一」が書かれたもの、行基焼椀に木偏とみられる文字が書かれているもの、天目茶椀の底に「靈」が書かれたものが出土している。また、羽子板には左向きに童子が描かれていた。

### 8 木簡の釈文・内容

#### (1) 「自今良」

141×23×4 051

城の裏鬼門にあたる土壘の基盤からは八〇枚を超える土師質皿が出土し、内郭の溝からは人形も出土している。木簡も呪術的な意味をもち、「今よりも良い状態を」という願いがこめられているとも

# 木簡研究第一七号

卷頭言

佐藤宗諱

一九九四年出土の木簡



解釈できる。ただし、墨書を仮名と解して「うかく□た□」と釈読することも可能である。

もう一点は曲物の一部と考えられる薄板の端に墨書されたものだが、保存処理中で釈読に至っていない。

木簡の釈読にあたり、中日展審査員の後藤幽泉氏のご教示を得た。

## 9 関係文献

尾張旭市教育委員会『尾張旭市印場城跡』（一九九七年）

（七原惠史）

- 一九七七年以前出土の木簡（一七）
- 平城京跡左京二条二坊六坪  
刻齒簡牘初探—漢簡形態論のために—  
新潟特別研究集会の記録
- 国史跡指定答申なつた八幡林官衙遺跡・小林昌二、八幡林遺跡の時代的変遷：田中靖、古代越後平野の環境・交通・官衙：坂井秀弥、封緘木簡考  
…佐藤信、八幡林遺跡木簡と地方官衙論：平川南、討論のまとめ  
書評 鬼頭清明著『古代木簡の基礎的研究』
- 頒価 五五〇〇円 送料六〇〇円  
今津勝紀  
彙報